

言語文化研究所

1 理念・目的

言語文化研究所は、言語についての基礎研究、人間の精神文化の研究、そして両者の統合研究を通して、新しい知的価値を創造しようとする研究機関である。言語研究を通して「人間精神における普遍的な特性」を確認することと、人間の長い歴史の流れのなかで各地域・各時代の民族における文化、思想、社会の多様性、特異性に注目することが統合されてはじめて人間本性に関する真の総合理解が可能となるが、かかる観点から人間本性を多角的に研究している言語文化研究所は、我が国でもきわめてユニークな研究機関であり、21世紀における新しい知の独創的な研究拠点として国際的にも注目される先導拠点となるであろう。言語文化研究所の理念については、「慶應義塾大学言語文化研究所将来計画検討小委員会」に詳述している。

2 教育研究組織

現行の研究組織体制は、言語研究、西洋古典学研究、イスラーム文化研究、東南アジア文化研究に従事する専任所員を中心に、さまざまな領域の研究者が兼任所員・兼担所員・客員所員としてプロジェクトを組織し、研究する形をとっており、すでに一定の研究成果を収めている。今後は、これらの多様なプロジェクトを横断する統合的なプロジェクトを整備し、内外の研究者の参加が、より容易となるような工夫が必要であろう。海外の研究者を所員に加える制度上の改革も必要である。また、若手の人材を育てるため、塾内外に向けた言語文化研究所独自の研究生受け入れ制度を創設することも検討課題である。

3 教員・教員組織

(1) 教員組織

言語文化研究所は専任所員 7 名を擁し、兼担所員（塾内教員）兼任所員（塾外教員、慶應を退職した教員を含む）と協力しながら、言語文化研究所の理念に適う基礎研究プロジェクトを遂行している。

また、言語文化研究所特殊講座にも、非常勤講師にご協力いただいている。極めて専門性が高い特殊な言語の教育環境として、国内の他大学・他機関と比較してもあまり類を見ないものであり、これらの言語の教育・普及に大いに貢献するものともなっている。

過去 5 年間の兼担所員・兼任所員・特殊講座非常勤講師の人数の推移は以下の通りである。

年度	2007	2008	2009	2010	2011
兼担所員	22	20	19	19	18
兼任所員	37	36	40	55	54
特殊講座の 非常勤講師	9	9	8	9	9

(2) 研究支援職員・組織の充実度

言語文化研究所の事務スタッフは、常勤嘱託 1 名、非常勤嘱託 1 名（研究所の図書登録を担当）の 2 名である。近年の研究所の事務量の拡大により、事務体制の拡充は重要な検討課題となっている。

蔵書管理については、今後、図書館スタッフとの連携も検討していく予定である。

(3) 教員の募集・任免・昇任

国内外に向けた公募などを含む最適のやり方で教員を募集している。

任免・昇任は、運営委員会で選ばれた審査委員会がその可否を審議している。

4 教育内容・方法・成果

(1) 教育課程

言語文化研究所は、固有の学生・院生の募集をしていない。しかし、研究所特殊講座を設置し、各学部の学生・院生に、学部単独では開設困難な個別言語教育の場を提供している。この特殊講座については、教員の意見や受講者数の推移などを考慮しながら、設置科目的検討を行っている。単位認定については、各学部・研究科のガイドラインにしたがっている。

文学部開講の全専攻共通科目である言語学関係講座については、言語文化研究所が講座の編成を担当し、科目担当者の選任も担当している。また専任所員は全員、文学部に兼任教員として出講している。

大学院教育については、専任所員のうち、1名が社会学研究科委員を兼任している。

専任所員の主宰する学部ゼミのゼミ生や専任所員が指導教授をつとめる大学院生については、研究所が主催する言語学コロキアムや東京言語心理学会議（Tokyo Conference on Psycholinguistics、略称 TCP、使用言語：英語）などに積極的に参加を促し、国際的な活躍が期待できる研究者を育成すべく、努力が重ねられている。

現在開講されている特殊講座は次の通りである。

- アッカド語初級　・II
- アッカド語中級　・II
- アラビア語基礎　・II
- アラビア語古典　・II
- アラビア語現代文講読　・II
- アラビア語文献講読　・II
- ヴェトナム語初級　・II
- ヴェトナム語中級　・II
- ヴェトナム語文献講読 I・II
- カンボジア語初級　・II
- サンスクリット初級　・II
- サンスクリット中級　・II

タイ語初級　・II
 タイ語中級　・II
 トルコ語初級　・II
 トルコ語中級　・II
 ペルシア語初級　・II
 ペルシア語中級　・II
 古代エジプト語初級　・II
 古代エジプト語中級　・II
 朝鮮語文献講読　・II

また、過去 5 年間の特殊講座受講生は次の通りである。

	2007	2008	2009	2010	2011
アッカド語初級	18	17	12	23	28
アッカド語初級	14	17	11	23	26
アッカド語中級	6	3	4	1	2
アッカド語中級	6	3	4	1	2
アラビア語基礎	19	28	37	35	24
アラビア語基礎	19	24	35	35	23
アラビア語古典	1	3	1	8	2
アラビア語古典	1	2	2	7	2
アラビア語現代文講読	7	1	4	3	6
アラビア語現代文講読	7	1	4	3	6
アラビア語文献講読	2	3	5	6	2
アラビア語文献講読	1	2	5	5	5
ヴェトナム語初級	11	23	15	9	6
ヴェトナム語初級	9	21	13	7	9
ヴェトナム語中級	3	1	1	0	0
ヴェトナム語中級	3	1	0	0	0
カンボジア語初級	14	3	8	13	8
カンボジア語初級	15	3	6	13	4
サンスクリット初級	4	14	10	5	4
サンスクリット初級	4	14	10	6	3
サンスクリット中級	1	10	1	0	2
サンスクリット中級	1	10	1	0	16
タイ語初級	18	4	13	16	14
タイ語初級	18	4	13	15	13
タイ語中級	3	25	3	3	11
タイ語中級	3	25	3	3	2
トルコ語初級	12	3	15	6	2

トルコ語初級	10	2	14	6	3
トルコ語中級	1	15	3	6	3
トルコ語中級	1	15	2	7	1
ペルシア語初級	8	4	6	4	25
ペルシア語初級	8	3	7	5	25
ペルシア語中級	5	4	4	2	1
ペルシア語中級	5	3	3	1	1
古代エジプト語初級	5	4	12	18	9
古代エジプト語初級	4	4	12	14	7
古代エジプト語中級	1	6	1	2	9
古代エジプト語中級	1	6	1	2	8
朝鮮語文献講読	3	8	6	8	2
朝鮮語文献講読	5	7	4	7	2

(2) 教育・研究指導方法とその改善

教育効果をより適切に測定（評価）するための工夫改善への組織的取組み

言語文化研究所特殊講座については、各科目の担当者との連絡を密にすることによって、個々の受講生が必要とする能力が身に付いたか否かについて、正確な把握を試みている。

大学院および学部での教育については、各研究科および各学部でのガイドラインにしたがっている。

成績評価の厳格性・客觀性を確保するための仕組

言語文化研究所特殊講座については、各科目の担当者に各々の担当科目の特性に見合った、厳格で客觀的な評価方法・基準を示すよう要請していくことを検討している。しかし、特殊講座のような達成度か問題となる授業の成績評価において、GPA制度は必ずしも適切ではないと思われる。

大学院および学部での教育については、各研究科および各学部でのガイドラインにしたがっている。

適切な履修指導または効果的な研究指導を行うための制度・工夫

言語文化研究所特殊講座については、受講者数が比較的少人数であるので、教室外の指導（オフィスアワーなど）にはきわめて柔軟に対応可能な状況にある。研究所の会議室や共同研究室を非常勤講師にも開放している。

大学院の教育については、オフィスアワーをはじめ、十分な指導体制のもとに、院生が活発な研究を行っている。また、教員の関わる研究プロジェクトへの参加も促し、論文執筆の指導も密に行っている。

学部の教育については、各学部でのガイドラインにしたがっている。

教育改善または教育研究指導方法の改善への組織的な取組み

言語文化研究所の開講している特殊講座は、概ね標準的な教育カリキュラムのまだ存在していない諸言語の講義であり、しかも受講者数がそれほど多くはない。その特性を活か

して、受講者の要望、それぞれの語種が関係する専門分野の要請等に柔軟に答えてゆくことを方針としている。

大学院および学部の教育については、各研究科および各学部のガイドラインにしたがっている。

7 教育研究等環境

(1) 施設・設備

言語文化研究所は、南校舎完成後の塾内諸部門の再配置に伴い、平成 24(2012)年3月に西別館より南別館6階・7階に移転した。その際に教室として使われていたフロアを全面的に改装し研究所の研究体制に適合的な研究教育環境を実現することができた。安全で静穏な研究環境であることはもとより、所長室、専任所員の研究個室、兼任・兼任所員および訪問研究員用の共同研究室、研究所蔵書を同一フロアに一括配架した書庫、閲覧者用のスペース、小規模なセミナーを開催可能な会議室を確保し、さらに研究教育活動を支援する事務室を中心にしてそれらの研究教育のための空間を統合的なユニットとして構成することにより、研究所の諸研究プロジェクトの遂行をより円滑に実践することが可能となった。

蔵書とくに貴重書の保存状況は従来と比べて大幅に改善されたが、依然として湿度管理などの点に注意を払う必要がある。研究所蔵書の利用の為の閲覧システムの改善も今後の課題である。

(2) 教員の研究時間を確保させるための方途

言語文化研究所は基礎研究を本務とする機関であり、専任所員は塾内外の出講を通じ学部及び大学院教育と各種委員会参加を通じ本塾の大学院研究科及びその他の大学内機関の運営に従事しているが、これらが研究時間に影響を与えないよう各自が充分留意している。またこれら研究以外の諸活動に従事するにあたっては各自が事前に研究所所内会議と運営委員会へ事前に報告し、協議を経て承認を得ることが義務付けられている。

(3) 特筆すべき競争的な研究環境

研究所の専任所員は研究を本務としており、各専任所員は積極的に外部及び内部の競争的資金に応募して、その研究案の多くが採択されている。(付表「研究費採択状況(外部資金及び内部資金)」を参照)

研究費採択状況

	2007	2008	2009	2010	2011
科学 研究 費 補 助 金	特定領域(A)		1	1	
	萌芽的研究		1	1	1
	基盤研究	1	5	5	3
	奨励研究(A)				
	国際学術研究				
学事振興資金	1	1	1	1	1
受託研究		1			
その他		1	1	2	1

また研究所は、塾内の専任教員を代表とするグループを対象として、優れた人文科学の基礎的研究プロジェクトを募り、2年間の間、研究費を支給する活動を行っている。公募研究がそれであり、いわば研究所は慶應義塾による塾内の競争的研究環境を醸成する試みの一翼を担っていると言えよう。

(4) 研究論文・研究成果の公表

研究所の恒常的な研究成果の公表の場としてはまず年刊の『紀要』が挙げられる。各専任教員はそこへの毎年1点の研究成果の寄稿をその職務義務とするが、兼任所員、兼任所員は事前申請の上、寄稿する権利を有する。近年は兼任・兼任所員が『紀要』に積極的に寄稿し、過去2年度は、その寄稿がそれぞれ十本前後に及んだ。かくして研究所の『紀要』は慶應義塾の人文科学基礎研究の重要な発信源の1つとなり得ているのである。

また上記、公募研究の研究成果は、2年間の研究期間終了の2年以内に各研究分担者が寄稿する論文集の形で纏められ、平成19(2007)年度から平成23(2011)年度にかけて3冊公刊されている。さらに研究所には常時1件ないし2件の、専任教員または兼任所員が代表となり、3年ないしはそれ以上の期間をもって単行書出版を目的とする「共同研究A方式」と呼ばれる研究プロジェクトが行われているが、その研究成果は同じく平成19(2007)年度から平成23(2011)年度にかけて、2点の論文集として刊行されている。これらの成果は慶應義塾出版会の御協力を得て、一般読者にも販売されている。

さらに研究所は、国内外の著名な研究者を招き、公開講座及び「イスラーム・セミナー」「言語学コロキアム」を開催し、人文科学基礎研究の成果を広く社会に紹介している。また特筆すべき活動として、毎年3月に「東京言語心理学会議」(略称TCP)が外部資金によって開催され、国内外から若手を中心として多数の認知系言語学の優れた研究者を集め、最新の研究成果発表の場として注目を集めている。その成果はひつじ書房から毎年1点 Proceedings(発表論文集)として公刊されている。

(5) 研究活動と研究体制の整備

論文等研究成果の発表状況

専任教員は全員、言語文化研究所が毎年刊行する紀要に論文を執筆している。このほか、各自、国内外の影響力のある学術雑誌に寄稿・投稿している。また、研究所が主催する言語学コロキアム、東京言語心理学会議、講演会等における報告・発表、ならびに共同研究による成果を逐次、論文や単行書として公刊している。平成14(2002)年度からは、研究所の活動を広く紹介し、その成果を社会に還元する目的で、毎年公開講座を開催している。これらの研究活動については、その詳細が紀要に掲載されている。

年次	著書(共著)点数	論文点数	学会等発表	その他*
2007	2	8	5	3
2008	2	11	5	8
2009	1	11	8	5
2010	1	13	7	2
2011	1	15	7	7

*「その他」には、書評、事典項目(1つの事典に複数項目を記述しても1点とした)、解説記事・

コラム記事、シンポのディスカッサント、一般向け公開講座、科研などプロジェクト報告書（内容によっては著書あるいは論文扱いとした）を含む。

特筆すべき研究活動状況

専任所員は国内外の学会に所属し、各学会の大会に積極的に参加、研究発表を行うほか、学会運営上も会長、理事、評議員などとして、重要な役割を担っている。言語文化研究所の国際的活動には、海外から著名な研究者を招いて行われる言語学コロキアムや東京言語心理学会議があり、多数の参加者によって活発な議論が交わされ、多大な成果を上げている。その他の国際的共同研究は主として、科研費の国際学術研究等を通じて行われている。

将来展望としては、より一層国際的な研究活動が遂行できるような体制の確立を考えていきたい。

附属研究所との関係・将来展望

言語文化研究所は、専任所員が中核となり、兼任所員（学部・諸学校等、学内専任教員）や兼任所員（学外研究者）の参加・協力を得て、数々の共同研究を展開している。また、専任所員は文学部、大学院文学研究科、社会学研究科に出講している。このように研究所と学部・大学院は、研究と教育の両面において常に緊密な連携をはかっており、今後も一体となって更なる関係強化に努めていくつもりである。言語文化研究所の重点領域のひとつである言語学については、関係学部とも協力しつつ、将来独立研究科を組織することも考えたい。また研究所独自の教育・研究プログラムを編成し既存の研究科に履修単位の認定等を提案していきたい。

8 社会連携・社会貢献

（1）社会人向け教育プログラム・公開講座の開設状況

言語文化研究所が主催する言語学コロキアム（随時）と公開講座（年数回）は、共に入場無料で公開している。言語学コロキアムはより専門的な内容であり、ある程度の基礎知識を有する聴衆を対象としている。一方、研究所創立40周年を契機として平成14（2002）年度から開催している公開講座は、専門的研究を広く一般にわかりやすく伝えることを目的とするもので、毎年異なるテーマを掲げ、連続講座を開いている。テーマの選定にあたっては、専任所員の専門領域を中心に置きつつ、運営委員、兼任・兼任所員、特殊講座講師からの協力も得て、本研究所の持つ大きな特色である多様性を最大限に生かすよう努めている。ポスター掲示や研究所ウェブサイトへの掲載といった方法で塾内外に広く案内を行い、例年多くの参加者を得て好評を博している。過去5年間のテーマは以下の通りである。

年度	テーマ
2007	「現代認知科学の諸相」
2008	「女神の変容：古代オリエント世界から地中海世界へ」
2009	「イスラーム文明と西洋世界」
2010	「天・神々・祖先：中国人の思想と信仰」
2011	「ウェルギリウスとホラーティウス 黄金時代をつくった二人の詩人」

このほか、年度末の研究所行事である総会特別講演会も、研究所ウェブサイトに案内を掲載しており、実際上外部の聴衆の参加が一般的となっている。今後の方向性として、これをさらに発展させ、上述の公開講座に近い形のものとすることも考えられよう。また、研究所の公募研究プロジェクトについても、その成果を隨時公開シンポジウムなどの形で報告してもらうように代表者に要請している。

9 管理運営・財務

(1) 外部資金等

各年度で受け入れ状況は若干異なるが、専任所員が、文部科学省科研費補助金による研究プロジェクト（基盤研究（B）（C）、委託研究、萌芽研究）、日本学術振興会グローバルCOE プログラムによる研究プロジェクト（「心の進化と発達」と「論理と感性の先端的教育研究拠点」）に、研究代表者あるいは研究分担者として従事している。さらに学術振興会科学研究費助成事業の挑戦的萌芽研究、文部科学省による戦略的研究基盤形成支援事業や文部科学省委託費、萌芽研究、特定領域研究による研究補助、受託研究なども受け入れている。また最近5カ年では、小泉基金、福沢基金、学事振興資金による個人研究も受けている。

(2) 予算配分・予算執行のプロセスの透明性

予算配分およびその執行は、通常、関係部署（研究支援センター、グローバルCOE事務局）を通して適切に行われている。

10 内部質保証

(1) 大学全体および各学部・研究科等における恒常的な自己点検・評価システムの確立状況

言語文化研究所は研究活動に重点を置く。これまで各所員はその研究成果を国内外において発表してきた。現在のところ、その評価は各自の属する各分野の学内外の専門家、更に学会等に委ねており、研究所自体がこれらの研究業績を総体的に点検し且つ評価するシステムは確立されていない。

(2) 自己点検・評価の結果を将来の改善・改革につなげるための仕組み

言語文化研究所の研究活動及び成果の評価は各所員の高度な専門性の故に各分野の学会に頼らざるを得ない。従って、これを総体として点検・評価することは困難な面を有する。